

---

# Magical Girl May Cry

A'leN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M a g i c a l   G i r l   M a y   C r y

### 【ZPDF】

Z0632N

### 【作者名】

A - l e N

### 【あらすじ】

ミッドチルダにも現れ始めた悪魔。しかし、悪魔がいる所には必ず彼がいる。真紅のロングコートに鈍い銀髪、背にした『反逆』の名を持つ魔剣と、腰に携える二丁の拳銃。伝説の魔剣士の息子、『ダンテ』は一人の魔導師『スバル』と出会う。彼女は彼を見たことがあるのか?自然に彼に重なる一人の男の姿。一つ一つの運命の歯車は噛み合い、破滅へと回り始める……

## 第一話 『邂逅』（前書き）

『魔剣士スパード』『英雄』『正義』『悪魔』『子供』『半人半魔』  
『反逆の魔剣』『悪魔狩人』『D e v i l M a y C r y』『最強の魔剣士』

### 第一話 『邂逅』

## 第一話 《邂逅》

「『D e v i l M a y C r y』…OK、今から向かう。報酬はピザ一週間分な」

汚れた店内で、埃の積もった机の上に足を上げピザをほおばる男。鈍い銀色の髪に整った顔、身長はゆうに190cmを超えているだろ。

「二ヶ月くらい前から、騒がしいじゃねえか…。ま、そっちの方が楽しいがな」

ソファーにかけてあつた真紅のロングコートを羽織り、壁に立て掛けあつた大剣を肩に軽々と担ぐ。

「さあ、行くぜ。クソどもを生かしちゃおけねえ」

そして事務所の扉を蹴つて開け、外に出る。夜の風が彼の真っ赤なコートと銀色の髪をたなびかせた。

「派手に行くか…！」

一度口笛を吹くと、彼は建物の影に吸い込まれる様に夜の闇に消えていった……

：

「また、アレ?」

「うん。 田撃者はゼロ。 殺害されたのは管理局のA級魔導師や

「やつと、JU事件が終わって、皆落ち着いてきたの…」

頭を抱えているのは高町なのは一等空尉。 八神はやても同様に浮かぬ顔をしている。

「”悪魔に襲われている”か…。 一体なんなんやろ」

「想像上の怪物。 人の恐怖の根源… 一つの言葉じゃ表しきれないね」

JU事件が終わってから二ヶ月。 ミッドチルダではある怪奇事件が続いていた。

それは、管理局などの魔導師が次々に襲撃され、誰一人として生きて帰らない。 それも人間の仕業とは思えない程惨殺されており、胴体が真つ二つなどと言うのも珍しくはない。

ただ、この事件が怪奇と呼ばれている一番の理由。

それは、襲撃された魔導師たちが助けを呼ぶ際、必ず”悪魔に襲われる”と言つのだ。

管理局は当初はこれを信じず、スカリエットの残党と見なしていた。

しかし、いつも度重なつては管理局も放つてはおけない。 魔導師を

総動員させ、大がかりな調査を行つた結果、ある一つの手掛けりが出てきた。

「それが、この機動六課に回されてきたんやよ」

真剣な顔でなのはに語るはやで。

何故なら、この仕事は六課が請け負うものではない。しかし、一つの理由だけで引き受けなければいけない事になつてしまつたのだ。

「何人かの調査官が聞いたらしいんやけど、このミッドナルダのどこかに”悪魔”を狩る男があるらしいんよ」

「悪魔を…狩る…？」

「うん。で、その男の人にはか協力してもらおうと思つた管理局は、上位魔導師ランクを持つ魔導師が多い六課に仕事を回してきただつてワケや。もしその男と何かあつた時のためにな」

「そつか…。そうだね。仕方がないか」

また一つ溜め息をつく。六課は何かと変な仕事を回されることが多いのだ。今回も例外ではない。

「じゃあ、私はこれで失礼します。何かあつたら相談してね?はやてちゃん」

「うん、ありがとう。じゃあ」

なのはは隊長室を出て、訓練を続けているFW陣の所に戻り、はやはては中断していたデスクワークに取り掛かるのだった……

：

「ちつ…。やつぱり昼間は暇だな…」

ソファーに寝そべり、暗い天井を見つめる銀髪の男。昨日の夜は一つ仕事が入り、現場に行つたはいいが既に被害者らは死亡。残つた悪魔を片付けただけ。もつとも、あんな低級悪魔にやられる魔法使いもどうかと思うが。

「この街じや、”「イイツら”は使えねえんだよな…。宝の持ち腐れだぜ」

愚痴をこぼしながら、従来の一回りは大きい二丁拳銃を両手の指でくるくると回す。

「この”デバイス”も、もうちょっと使えばイカれちまうだうしな…。買つ金もねえし」

一人溜め息をついていた時、事務所の電話が鳴る。男はゆっくりと立ち上がり、倒れていた椅子を立て直して座り、机に足を乗せた衝撃ではね上がつた受話器を華麗にキャッチする。

「『Devil May Cry』…OK、待つてたぜ。今からそつちに向かう」

相手の話が終わらぬ内に電話を切り、この時間珍しい”合言葉の仕事”にテンションを上げる。

「報酬は… そうだな。雑魚が相手だつたらストロベリーサンデー一週間分で許してやるか」

連日に入った仕事に胸を踊らせながら、銀髪の男は昼間の街に出ていった……

⋮

「遂に私たちも出動命令が出たね…」

「相手が”悪魔”だろうがなんだろうが関係ないわ。私たちは私たちにできる事をやる。それだけでしょ？」

「やっぱティアってかつこいいーーー！」

相棒の気合いの入り様を見て歓喜の声を上げるのは、機動六課若きFW陣の一人『スバル』ナカジマ』二等陸士。その様子に苦笑いを浮かべる彼女の相棒『ティアナ』ランスター』同じく二等陸士。隣では彼女らより少し年下の『キヤロ』ルルシエ』と『エリオ』モンティアル』が小さく笑っていた。

彼女らは今、空高くをへりに揺られながら街の一角を目指している。理由は、先ほどスバルが言つていた様に遂に機動六課FW陣にも出

動命令が出たからだ。

未知の存在、”悪魔”との遭遇。若き少女たちにとつて、体験したことのない事例。腹をくくらなければ、今まで同様生き残る事はできない。

# 「惡魔、か？」

「どうしたのスバル？」

「ふえ？ な、なんでもないよっ！ 気のせい氣のせい！」

先ほどとは違つて珍しくしんみりしているスバルを見て、ティアナは顔には出さないが心配している様だ。しかしスバルはすぐに普通の笑顔に戻り、何事も無かつたかの様にエリオ達と喋りだした。

「（ あ、 驚かして… ）」

『もうすぐ到着だ！ 相手はまだいる、間に合つたみたいだ！ 頑張つてくれよ！？』

「「「「はこい!...」」」

ヘリの操縦者『ヴァイス陸曹』に背中を押された四人は、近くに着陸したヘリから降りていった……

「！」これが……！」

驚愕の声を上げるティアナ。彼女の目に映っていたのは、何故か赤く染まつた空を浮遊する《死神》の様な悪魔。手には大きな鎌を持ち、漆黒のマントに顔の部分には氣味が悪い仮面。

恐怖 を再認識する事ができるほど、”それら”は異様な雰囲気を漂わせていた。

しかし、彼女が見とれていたのも数秒。悪魔たちを桃色の放射状の攻撃が包み込む。

「見とれてちゃだめだよ、ティア。これから戦わなきゃいけない相手なんだから……」

声の主はなのは、多少の驚きはあるだろうが、異形に怖れる事なく立ち向かう姿はさすが《エースオブエース》と言った所だろうか。

「す、すみません！ でも、初めて見たけど……」

「うん……ほんとに《悪魔》だね」

どれだけ撃ち落とそうがどこからともなく現れる。その中には巨大な鎌を持っている悪魔も出てきた。更に、的確な撃退法が分からなければ倒すのに普通以上の魔力をする。

戦闘が始まつてわずか十分後、既にFW陣には疲労が見え始めていた。

「くつそ、どうなつてんのよ……！」

「落ち着いてティア！ 無駄に魔力を使つたらダメだよ……！」

「危ない！ スバル！！」

スバルが一瞬ティアナに気を取られた時。彼女の背後には悪魔の鎌が迫つっていた。

「（私のシューターも間に合わない……でも、あの攻撃をバリアジャケットが防げるかどうか……！）」

あえてこの攻撃を受けるという手もある。無理に回避行動を取つて、逆に出来た隙の方が危険である。しかし、体験した事のない悪魔の攻撃に、果たしてバリアジャケットは耐えられるのか。

しかし、そんなのはの考へも無駄に終わる。

「キヤハハハハハハハハ！」

鎌を振りかぶつていた一体の悪魔に、突如大剣が突き刺さる。悪魔は高笑いを上げながら消滅していった。

「やっぱ雑魚か…。大丈夫かい、嬢ちゃん？」

振り返つたスバルの前に立つっていたのは一人の大男。銀色の髪に真紅のロングコート、右手には先ほどの巨大な剣を持っている。

「あ、あなたは……？」

「俺か？ 何て言えばいいんだかな……」

その顔は整つた、端正な顔立ち。しかし、その鋭い碧眼が、再び悪魔達に向けられる。

「俺の名前は『ダンテ＝レッドグレイヴ』だ。けど、まあこの際だ。本当の名前を教えておくぜ」

手に持つ大剣を勢い良く地面に突き刺し、両手で腰のホルスターから一丁の拳銃を取りだして眼前の悪魔に向けた。

「俺は悪魔<sup>デビルハンター</sup>狩人のダンテだ。忘れないでくれよ？」

その男『ダンテ』こそが、彼女らが探していた“悪魔を狩る男”だつた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0632n/>

---

Magical Girl May Cry

2010年10月9日22時57分発行